

コスモスの思い出

広い敷地の真ん中に約300坪の実験棟、その周りにアンテナが三基、又その周りを大きく、バラ線で囲まれた敷地にはコスモスの花が、一面無数に咲き乱れていた。

実験棟はコンクリート作りで、屋上は平らで広い庭のようであった、ここは神奈川県三浦郡初声村高円坊、五十年以上前の懐かしい地名である。ここは入隊前の約三年三か月を過ごした所である。

周りは高台になっていて、見渡す限りの三浦大根畑である。農家は周りの低い所であり、そこから通って農作業をしていた。どの農家の庭先にも鈴なりになった蜜柑の木が植えてあった、温暖な土地であろう。

屋上に出て南を眺めれば、三浦三崎の城ヶ島、瑠璃色の海の油壺を手前に、太平洋が水平線ごと視界に飛びこんでくる。東に向きを変えれば東京湾だ、大小の船が行き交い航行しているのに、じつとしている様に見え、まるでお伽の国の風景だ。西は相模湾、富士山が裾をばかして海に浮かんで絵図のように幻想的だ。

北西は、浪子と武夫で有名な逗子の海岸が遠望でき、北東には陸軍の高射砲陣地になっていた。

昭和十六年の夏、国民徴用令で、同級生三人と一年上の三人計六人が横須賀の海軍技術工廠受信実験所に入所した。徴用検査の時、お前は何か特技があるかと聞かれたとき、ラジオいじりが好きだったし、簡単なものは作って得意になっていたので、即座に「ラジオ組み立てが出来ます」と答えた。検査官は電波関係の仕事が適当と思ったのだろう。あの時、珪藻土山で力仕事していたので「力があります」等と答えたら、造船工場か、兵器工場に徴用されたらう。

横須賀の実験所に、逗子の寄宿舎から電車で通った。同郷の六人が一



室だった。寄宿舎の生活は総て軍隊と同じである。朝六時に起床、朝礼、点呼、体操、食事、駆け足で乗車、八時の作業開始まで入所しなければならぬ。生まれて始めて故郷を離れた十七歳の青年は世間知らずである。あの時は辛かった。

事務室に配置されたが、田舎者の悲しさ。仕事もろくに与えられず、一日の長いこと、故郷の珪藻土山で力仕事していた体である。とうとう辛くて泣いてしまった。「三浦半島の真ん中あたりにある、初声実験所に行くか、そこは寂しい所で、殆ど休みなく、夜は守衛と二人だけになり、実験所の夜警もやらなければならぬ。食事も風呂も一人で行わなければならぬ」と言われた。

是非やって下さいとお願いし赴任が決まった。寄宿舎の友達とも別れて単身初声受信実験所に、毎日横須賀から通って居る研究員と共に赴任した。

私の居室は実験所の入り口にある守衛室である。約五、六坪の建物である。粗末な台所、浴室、トイレ等が付属していた。守衛は年とつた元海軍軍人で、入り口で軍服を着て見張り、入ってくる軍人や研究員に拳手の敬礼をする。戦時中であるので厳格である。私の勤めは建物の中央の玄関脇にある事務室で、研究以外なんでもしなければならぬ。

通ってくる研究員の出勤簿の整理、そして横須賀の本部に昼食の注文、広い廊下やトイレ庭などの掃除、電話の取り次ぎ、小さいダットサン（生産車）で横須賀の本部から運んでくる昼食の配膳、等を一人でやらなければならぬ。

夕方後、約三十名の研究員や軍人はバスで帰って行く。後に残るのは守衛と私で、二人きりになる。建物内をすっかり点検し、戸締まり電源を切り、施錠し守衛室に戻る。守衛は二人居て毎日交代で通っていた。皆が帰った後の静けさは何と例えたらよいか、今でも思い出される。風が出るとヒュウヒュウとアンテナを切る風の音、広い構内一面に咲



くコスモスの花の揺れ、夜ともなれば、遠く海に浮かぶ船の灯火、満天に輝く星。アンテナと、研究棟を浮かび上がらせる満月や、新月の淡い光が私をロマンチックな世界に引き込んでしまう。満月の美しい夜、屋上にゴザを敷き寝ころんで、月を眺めた夜もあった。感傷家で涙もろい一面があり、一人で静寂の空間に浸って居たようだ。

約半年一人で頑張った、給料は一緒に入所した同郷の友達より一・八倍位多くて五十円以上だった。

その内から毎月十円ずつ母に仕送りした。友達は反対に実家から、いくばくか仕送りを受けて居たようだ。研究所もだんだん人員が増えてきて、事務所にも女子が二丁四人入り、大学出の事務長が入って来たので、私は好きな仕事に配置換えして貰い、工作室（約十五坪）で研究員の注文品を作り、合間に電気の事やラジオ等を夢中でやっていた。その部屋では入隊するまで働いた。

配置換えと同時くらいに、構内に寄宿舎ができ、約三十名位で寮生活が始まった。舎監は海軍軍人将校で総て規律は軍隊式である。朝は起床の号令とともに跳ね起き寮前に整列、点呼を受けた後、近くの農道約二千米をかけ声とともに駆け足、帰って掃除、朝食である。食事は近くから通ってくる年輩の男の人二人で石井さん、石倉さんが作ってくれる。寮生活もなれて来た。近所の農家とも知り合いになり、よく遊びに行き、東京見物にその家の子供二人を連れて行った事がある。新宿あたりで写した写真が今でも残っている。又老夫婦とも知り合いになり、毎晩のように遊びに行き、子供か孫のようにお世話になったのを思い出す。

毎週一日、青年学校で横須賀に通った。国民皆泳運動で久里浜海岸に皆で泳ぎに行った事もあった。

農繁期には二丁三回生家に帰され三丁四日働いて帰った。終戦の前の十二月一日、陸軍航空通信隊浜松基地に徴兵入隊した。

軍隊では殆ど通信術の訓練に明け暮れ、前線には行かず教わり得で、終戦直後の九月一日生家にたどり着いた。横須賀の三年三ヶ月と軍隊の九ヶ月が私の人間形成と職業に尊い指針を与えて貰い幸せな時代だった。初声受信実験所構内に咲き乱れ、風に揺れるコスモスの花の哀愁に似た風情が、忘れられない。